

# 榎茂都陸平の欧米視察旅行

—ヨーロッパにおける日本舞踊の  
紹介について—

桑原和美

## I はじめに

本研究は上方舞榎茂都流三世家元・榎茂都陸平による昭和6年(1931)から同9年(1934)にかけての欧米視察旅行、その中でもヨーロッパ各地で行った日本舞踊の紹介に焦点を当ててその具体的な内容と意味を考察するものである。この視察については彼自身が旅行中に書き留めた印象記、現地での講演原稿、公演プログラム、批評、写真、及び自著『舞踊への招待』(注1)などの資料から詳細な検討が可能である。

## II 欧米視察旅行の概要

### ①いきさつと目的

宝塚歌劇団において振り付けや生徒の指導を始めて以来、欧米の舞踊に強い関心を抱いていた榎茂都にとって渡欧は数年来の願望であった。当時すこしづつ輸入されるようになっていた洋書や写真などの情報に翻弄されるようになって理想の舞踊像を求めたにも関わらず、自らの行き詰りを解決する糸口を見い出せずにいた彼にとって、欧米における実際状況をその目で確かめる以外に方法は残されていないと思われたのである。そうした彼の心理は昭和2年頃から視察直前までの『歌劇』に如実に書き表されている。この彼の希望の実現に決定的とも言える助力を与えたのが宝塚音楽学校の校長であった小林一三であり、彼のはからいによって榎茂都は文部省嘱託という肩書きで出発の途につくに至った。

出発を目前にして述べられた彼の目的はかなり広範囲にわたったが、簡略に3点に絞ると、1・海外における正統な日本舞踊の紹介、2・榎茂都振付けの新舞踊の発表、3・欧米の舞踊理論の研究、であった。

### ②旅行行程

1931年2月26日に神戸港を出帆した後、南の航路を回ってスエズ、エジプトを経由し、4月11日にウィーンに到着した榎茂都は、同月28日の日本公使館が主催するパーティで最初の日本舞踊紹介を行い、また10月31日には同市において「日本舞踊の夕べ」と題するリサイタルを開いた。ウィーンには1年弱滞在し、その間にはブダペスト、ドレスデン、ライプツィヒ、ヴァイマルなどへも出掛けている。

1932年春にベルリンに移り住み、ここで当初からの希望であったルドルフ・ラバンのもとで舞

譜の研究を1933年末までの約1年半にわたり断続的に行っていた。またベルリン滞在中の日本舞踊の紹介については、ドイツ国内外を含めて少なくとも8回あったことが資料より明らかである(注2)。加えて、さまざまな舞踊や体操の研究所訪問、舞台公演の観賞など多忙な生活を送っている。

1933年12月にドイツを離れ、帰国の途中1箇月にわたりロンドンに滞在し、12月10日にImperial Society of Teachers of Dancing (ISTD・大英帝国舞踊教師協会)で、また14日には日本協会主催によりヴィクトリアホテルにて日本舞踊のレクチャー・デモンストレーションを行い、更にその後ロンドン・チェクェッティ本部においては日本舞踊の講座を開いた。そして1934年1月13日にロンドンを発った後、ニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルスを経てサンフランシスコから乗船し、同年3月13日に日本に帰国した。

## III 日本舞踊紹介の内容

ウィーンにおける日本舞踊の紹介では、まず第一に榎茂都の演舞を披露することを主とし、加えて彼が日本ですでに普遍的な芸術舞踊の理想的な形として創作し、それをウィーンのボーデンヴィーザー舞踊団に振付けた群舞「Sonata Appassionata」(ベートーベン曲)を提示することが意図された(注3)。しかしベルリン滞在以后の公演では、前半を日本舞踊の解説、後半を彼の演舞とするレクチャー・デモンストレーション形式に改めている。これは本物の日本舞踊を見せ、またその歴史的背景や様々な技術の意味合いなどをわかり易く示すことで、異なる文化的背景を持つヨーロッパの観客に単なるエキゾチズムではない、日本文化に対する正しい知識や理解に基づいた関心を求めた榎茂都独自の考えによるものであった。このような形でヨーロッパに日本舞踊を紹介したのは彼が最初であったと考えられる。またロンドンにおける彼の公演の内容は1934年にISTDから『Some Classic Dances of Japan』(注4)のタイトルで出版されており、これを読むと彼によって極東の異なる文化において発生・発展した舞踊の成立過程や技術が、比較的手法などの工夫と丁寧な解説・実演によって紹介された様子がよく理解できる。また、彼のレクチャー・デモンストレーションがISTDとしても極めてめずらしく出版物として残されたという事実は、400人を越えるロンドンの観客に対して行われたこの公演が大いに興味深く、意義のあることとして受けとめられたと考えて良い。

## IV まとめに代えて

紙面の都合上、口頭での発表内容を非常に省略した形で述べるにとどまったが、詳細は当日に当

日に配布した資料を参考にしていただければ幸いです。

榎茂都の欧米視察旅行は、当初の彼の抱負に違わず広範、且つ多くの点で深く内容を探求しようとしたものであったが、本研究ではそのごく一部を検討したにすぎない。彼が当時のヨーロッパの舞踊事情にどのように触れ、感じ、思考したかなどについては今後の研究において更に明らかにしていく必要があると考えている。

#### 注

- (1) 榎茂都陸平，全音楽譜出版社，1958。
- (2) 視察中の公演日時及び場所については発表時に配布の資料参照。
- (3) 公演当日のプログラムは11演目で「Sonata Appassionata」は第6番目に記載されている。このプログラムは配布資料に載せた。
- (4) ed. Cyril. W. Beaumont, The Imperial Society of Teachers of Dancing, London, 1934.